



双葉郡浪江町東南部の太平洋に面する請戸地区。この10Km先に福島第一原発がある。元耕作地には津波でひしゃげた車が未だ放置されている。(2013年6月／提供：復興庁)



特集

復興計画と 私たちの暮らし

福島・女川・釜石からみる、復興計画の今

復興庁が語る福島の復興計画と、それに対する意見を福島県内で活動する市民活動団体、子供をもつ自主避難者の3人に伺った。

復興庁に聞く、 これからの計画

初の意向調査から 見えた課題

現在、福島県全体の避難者数は約15万4000人、県内の避難者数は約9万8000人、県外への避難者数は約5万6000人である（25年5月時点）。復興庁は、今後の対応への基礎とするために、24年8月から7カ

意識調査を行った。5月に発表された調査結果によると、仮設住居(プレハブ、借り上げ合わせ)暮らしをしている人は約6～8割、家族分散状態にある人が約4～5割という。現在の避難生活で最も困っていることはいずれの市町村でも「コミュニティの形成」の回答が最も多く、ついで「就労・労働」であった。さらに、「避難先からの帰還意思は高齢者ほど高く、子供のいる世帯は低い傾向も明らかになった。

多くの課題が示される中、復興庁では福島復興再生総局の「もとインフラ整備、産業振興・雇用、除染・健康管理などの課題に取り組んでいる。また、今年に入って「ふるさと復活プロジェクト」という復興・再生の加速

福島への支援 活動団体が 考える今

国の復興計画への期待と意見

福島県に住み福島を支える

化を旨とする動きが始まった。このプロジェクトの柱は三つ。一つは帰還加速と区域の荒廃制御。原子力被災12市町村における避難解除区域の住民帰還促進の取り組みや、すぐに戻れない地域へ将来の帰還のため荒廃を抑え保全する。二つ目は、長期避難者の生活拠点形成。長期避難者を受け入れる自治体の生活基盤の整備と避難者支援のソフト政策を一体的に実施する。三つ目は、定住促進。原発事故による人口流出で地域復興に支障が出ていると認められる地域へ子育て世代が安心して定住できるように整備し、地域の復興・再生を促進する。

今、避難した人々と避難先の土地の住民との間に起こる軋轢が問題視されている。長期避難者の生活拠点の促進」が急が

長期避難者の暮らしへの施策

今、避難した人々と避難先の土地の住民との間に起こる軋轢が問題視されている。長期避難者の生活拠点の促進^一が急がれる今、その具体的な施策について復興庁参事官補佐の中島正樹さんが答えてくれた。

「仮設住宅などにお住まいの方々が、帰還までの長期にわたる避難生活を安心して過ごしていただく場所を早く整備しなければなりません。現在、福島県や市町村とともに町外コミュニティの整備に向けて取組んでいるところで、平成27年度までに約3700戸の災害公営住宅（復興公営住宅）の建設を目指しています」。

「町外コミュニティ」とは、長期にわたり家に戻れない避難者が、元の町の帰るまでに暮らす新しい生活拠点。復興公営住宅を中心として生活に必要なサービスを整え、故郷の外でも安心して暮らせる環境を確保する。来年の春から順次、第一期の復興公営住宅5000戸の入居が始まる予定だ。

活動をしてきた市民団体は、復

興庁の復興計画をどのように見るのだろうか。大震災直後から、救援物資調達配送基地を開設・提供し、避難初期からの避難している人たちに向けた情報提供や絆づくり活動を活発な道を行ってきたNPO法人うつ

くしまNFCネットワーク事務局長・鈴木和隆（かずたか）さんはこう語る。

「長引く避難生活で生活課題の切迫さ、社会問題の先鋭化、地域経済の疲弊、地域経営の破綻などの課題が顕著になってきています。復興庁の福島ふるさと復活プロジェクトによって、福島復興局の権限や予算執行権などが強化充実されるような

を大切にしてほしいと思います。同時に、居住不在地になる地域もあるという現実も提示すべきです」。

さらに「長期避難先でのコミュニティ形成に對してもこれから重要になるであろう課題を提示していく」。「福島ふるさと復活プロジェクト」の柱の1つである「長期避難者の生活拠点形成」に関わる事業が、単に災害公営住宅の建設に終わるのではなくその先の被災自治体を受け入れ自治体の中でどのように自治権を行使していくのか、そのことの必要性や課題までもっと踏み込むべきです」。

地元NPOが考える
新しい社会づくり

昨年12月に福島県がまとめた「福島復興計画（第2次）」には、重点プロジェクトが12まとめられているという。

重要なものです。しかしながら、基本理念「原子力に依存しない安全・安心で持続的に発展可能な社会づくり」が、どこまで心棒として各プロジェクトに浸透しているかという点、少々見えないところもあります。原発に依存しないという基本理念とプロジェクトの展開をつなぐ活動を、産業界（民間企業）、学校（教育・研究機関）、官公庁（国・地方自治体）、民間（地域住民・NPO）の四者が連携し、新しい社会づくりを行っていること

が大切です」。

そこには、福島県内で被災者を支え続けてきたからこそ見える復興への視点があつた。かつてない例・規模の課題を進むためには、行政と市民を結び彼らのようなNPO団体の細やかな動きがさらに重要になるだろう。

自主避難者の不安と願い

福島県からの避難

福島県の子を持つ母親の中には、自主的に情報を集め、今できることを探りながら暮らす人たちが多くいる。鹿目久美さんは、政府の発表に不信感を抱き、安達郡から実家のある神奈川県への避難を決めた。地元福島では避難することを言える空気ではなかったという。

鹿目さんは、信頼を築くために寄り添う姿勢を国に求めている。鹿目さんが震災後から現在にわたって一番困っていることは「自主的に動かないと情報が手に入らない」とことだという。自主避難者への補償や放射線情報など、目の前の生活に必要な情報は、自分でインターネットや講演会で情報を集めるしかない。

「個々に対応することの難しさはわかってはいるけれど、被害側が補償を得るために大変な手続きや手間を負うことに対し

限られたことではない。震災直後の流通や避難所の環境、政府と自治体の連携、被害の把握など。すべてにおいてその場の混乱の中で行き当たりばったりな対応しかしていない気がします」。

「復興を考える上では、今までに幾度となくあつた大災害での経験が活かされていないのではないかと思います。これだけの震災がある国で、きちんとマニユアル化されていない点は、それはこれからの復興計画にも当てはまるのだと思います」と懸念を感じている。

帰還加速への不安

復興庁が掲げる帰還加速への取り組みに対しても、「地区の

福島復興スケジュール

福島の復興については、国、県、民間がより緊密な連携、調整を行いながら進めていく予定です。とくに除染の実績など、事実が公開され共有されることが安心な日常と地域の産業を再構築するための前提となるのです。

	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
全体計画	<div>避難指示解除区域を復興の前線拠点とし、解除が見込まれる区域の復旧に繋ぐ。</div> <div>避難指示解除区域が拡大し、隣接地域と一体的に地域全体の復興を加速化。</div>								
広域インフラの整備	常磐道・幹線道路の再生、整備								
生活環境の再生	公共施設再生、復活								
産業の再生・創出	誘致計画、および優遇措置の検討								
除染	除染モデル事業	<div>先行除染（公的施設・常磐自動車道などのインフラ）</div> <div>本格除染*</div> <div>避難指示地区除染</div>							
災害廃棄物処理	中間貯蔵施設の確保、30年以内の最終処分方針の検討								
町外コミュニティの建設	各地公営形式の住宅およびコミュニティ整備								

（わわプロジェクトまとめ）

*除染の実現目標：平成25年8月末までに、一般公衆の年間追加被ばく線量を平成23年8月末と比べて、放射性物質の物理的減衰等を含めて約50%減少した状態を実現する。
(環境省) 平成25年8月末までに、子どもの年間追加被ばく線量が平成23年8月末と比べて、放射性物質の物理的減衰等を含めて約60%減少した状態を実現する。

一部や市町村の二画だけが帰れたとしても、ライフライン・就業・医療など人が生活する上で必要不可欠な物が無い状態で不自由のない生活が可能なのか」と語る。積算の被曝量だけが帰還の判断になっているのにも疑問を感じている。

「これから先の未来を、今よりも生きやすくしていかなくてはいけないという観点から復興を考えるのだとしたら、まずは事故の真実と大きさを明確にしておしい。そのうえで、帰還なり移住なり住み続ける上で必要な対応をしてほしい」

日本がはじめて体験する原子力事故は「人災」とも言われ、その代償を末端で引き受けるのは鹿目さんのような子供をもつ母たち、そしてその子供たちだ。目に見えない脅威や避難生



避難先の地で安心して暮らせるコミュニティづくりを目指す



宮城県牡鹿郡

女川町

2年を経た今、新たなまちづくりに向けて、「復興のまちづくり」が本格的に動き出した。しかしまだカタチはない。町民にはまだリアリティあるものとしてとらえづらいようだ。

以前よりも よりよい町に していきたい

復興を 実感できていない

女川町の復興計画は、平成23年9月に策定された『女川町復興計画』とりもどそう笑顔あふれる女川町』に基づき進められている。

漁業の町として知られる一方、高齢者率が宮城県内で3番ということもあり、漁業や水産加工といった産業から、暮らしまわりの住宅建設や医療・福祉といった面までをカバーする包括的な復興計画だ。



女川湾から見た女川町のイメージ。
©中央復建コンサルタンツ(株)／フタバデザイン／女川町

まずは 暮らしの再建

震災以前から女川町は町民と役場の距離が比較的近く、きめ細かなサービスが特徴だった。今でも宿直制度を残し、365日24時間、役場職員が町民の問い合わせなどに対応している。

その姿勢は震災後も変わらず、各地の避難所、離島、他市町村で暮らす町民へも役場担当者や暮らしまわりについての説明会を何度となく行った。

また住民とのまちづくり意見交換会「まちづくり協議会 ワーキンググループ」を、平成24年7月・平成25年3月まで15回ほど開催し、新しいまちづくりのために議論を重ねた。

しかし、町民にどれだけ町の青写真を理解してもらえているのかについては「疑問が残る」と佐藤さんはいう。

たとえば中心部の国道がT.P. 5.4m以上の高さにかさ上げされる。これまで市街地には工場、商店、民家が混在していたが、今度はエリア分けがなされる。

町の風景そのものが大きく様変わりするため、イメージパースや模型を見てもらっても、町民には想像しづらいのだという。

また、今、町民の最大の関心事は、現実的な暮らしをどう再建するかだ。自分の住まい、仕事、ひいては女川に住み続けるのか、といった具体的な決断が迫られている。

土地区画整理事業の対象となつていこともあり、住民への個別面談等を行い、役場職員が町民一人ひとりの希望を確認しているが、聞こえてくるのはやはり「今後、自分の暮らしがどうなるのか」だ。

しかし計画は確実に進む。「まだイメージしづらいかもしれないが、町並みは整いますし、住宅街もニュータウンのようになつて、みんなが住みたくなる町になると思います。これからどどん土が動いていきますから、ようやく、復興を実感してもらえんと思います」。険しかった佐藤さんの顔から笑顔がこぼれた。

*T.P.＝東京湾平均海面：全国の標高の基準となる海水面の高さ

未来の町の 担い手の参加は これから

3年目の心のケア

未来のまちの担い手となる子どもたちに、新しいまちづくりはどのように映っているのだろうか。

全校児童282人を指導する女川小学校校長 高橋良一先生に、現在の児童の様子を尋ねると

「見落ち着いているようですが、実は、阪神大震災のとき、3年目に心のケアが必要だった児童が一番多かったというデータがあります。われわれとしても注視しているところですよ」。

昨年、定例の避難訓練に、震災当日を思い出すから参加できないという児童がいたり、オーストラリアで起きた地震のときの津波警報で、泣き出す児童もいたという。

児童の約半数は住まいを失い、ストレスの多い仮設住宅暮らしを余儀なくされている。そんな状況を省みると、何事も無いかのように楽しく学校生活を送っている児童の何気ない仕草なども、ストレスが溜まつているサインではないかと、高橋先生は注視している。

また、女川町には平地が少なく、という地形的な要因から、仮設住宅が学校や公園、スポーツ施設などに建設され、子どもたちが思いっきり遊べる場所がほとんどないという状況である。

「子どもたちは、遊べる場所を望んでいるはずですよ。しかしそれを許さない状況があるということも感じているから口には出せないですね」。

支援への感謝と配慮

児童の心のケアには慎重に手厚く取り組む一方で、支援に対する配慮や未来へ向けた教育も積極的に行っている。

他県の児童との交流や、体験学習などは状況が許す限り継続しつつ、児童に「支援は当たり前」という気持ちを持たせないよう、感謝の気持ちを忘れない指導をしているという。



町の中心部は更地になり、これからまさに立ち上がろうとしている状況だ。
撮影／わわ新聞

各地の仮設住宅で暮らす人たち同士を繋いだり、インターネットを通じて町外の人たちへ女川をPRしたりという役割も担っている。

ディレクターでパーソナリティの木村太悦さんも、仮設住宅で暮らす女川町民だ。ほかのメンバーも町民が主体となり、リスナーと同じ目線です。

そこに寄せられたコメントの中には、「クリスマスシーズンに駅前で開催されていた『うみほたる』（イルミネーション）を復活させて、彩りある駅前になってほしい」、「今の女川町は住宅でいえば大規模リフォームに着手したところ。工事が終わったら、客人を招いて自慢の町をお披露目できるようになつてほしい」などがあった。

新しい町への町民の期待は大きい反面、「いつまでかかるのか」という不安の声が、お年寄りを中心に挙つていると、木村さんは言う。

届きづらい町民の声

木村さんは自薦で「まちづくり協議会ワーキンググループ」に参加した。15回ほど開催されたうち、仕事の都合で2度しか参加できなかったが、いろいろな意見が出ていて、議論はそれなりに実りのあるものだった。提言書もまとめられたが、議論の内容がそのまま直接町民の声として届き、形になるのは難しそうだと感じた。

一般町民が参加して「まちづくり」をしようという、大掛かりなことを、手探りで進めていることなのだから仕方が無いとも思う反面、残念と思う気持ちもある。

復興のシンボル、新女川駅、駅舎については、5月25日に説明会が行われたが、町民向きの施設ではない気がするというのは木村さん始め、リスナーからも挙つた声だ。今後のブラッシュアップ案に期待が集まる。

一方で、町民の生活に直結する住宅については、先行して今年度中に200戸ほど災害公営住宅が整備されるが、当然抽選だ。

一旦、仮設住宅でようやく新たなコミュニティが生まれたところで、また抽選。公平性を担保する上では最善の策だとは思ふ反面、他に方法はないのかと思つてしまいます」と木村さん。

また町を挙げて取り組む課題として人口流出がある。木村



求められている子ども達の「居場所」

女川の復興スケジュール									
	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
全体計画	復興期		基盤整備期			本格復興期			
まちづくり	応急仮設住宅入居 復興推進地域の指定	宅地造成・市街地かさ上げ	市街地復興の本格化						
漁業	防潮堤工事								
	定置網漁・サンマ漁・養殖再開		養殖本格再開(カキ)						
	仮設加工場・冷凍冷蔵コンテナ導入		市場・加工場本格再開						
			重点的復旧の漁港整備						
商工	仮設店舗での営業開始		商店街本格再開						
観光	漁港再開・セリPRなど		公共交通機関本格稼働・観光産業の本格再開						
医療・福祉	医療の復旧・支援員による避難所、仮設住宅のケア・訪問相談・心のケア		保健・医療・福祉機能の移転先稼働						
教育	学校設備の復旧・再建、児童生徒の就学支援		生涯学習充実・歴史的遺構・伝統文化の回復						
			総合運動場公共施設の復旧・整備						

(わわプロジェクトまとめ)

釜石市復興まちづくり基本計画 ＝スクラムかまいし復興プラン＝

〈目指すべき釜石の将来像〉

三陸の大地に光り輝き、
希望と笑顔が
あふれるまち釜石

『12のスクラムプラン』7つの基本目標を具体化し、
復興を支える主要施策

- ① 生命優先の減災まちづくりの推進（多重防御による津波対策の推進）：防波堤、防潮堤などの整備。避難誘導体制の整備。防災意識の高揚。
- ② 住まいとコミュニティの再構築：災害公営住宅の整備。安全な居住地の確保。仮設住宅での生活支援
- ③ 主要公共施設の再配置と土地利用：消防庁舎、市庁舎などの再配置。積極的な土地利用の展開。
- ④ 創造的エネルギー対策の推進：再生可能エネルギーの活用と普及。スマートグリッドの展開。LNG（液化天然ガス）供給基地化の推進。
- ⑤ 生活の安心ネットワークの構築：保険、医療、福祉、介護機能の向上と連携。
- ⑥ 新産業と雇用の創出：被災企業の復旧支援の推進、特性を活かした新産業の創出。
- ⑦ 三陸交通のネットワークの形成：三陸縦貫自動車道および東北横断自動車道釜石秋田線の早期整備。JR山田線、三陸鉄道の早期復旧
- ⑧ 食を支える地域産業の展開：魚のまちの復活（水産業の6次産業化）。魚市場機能の整備。
- ⑨ 商業と交流空間の機能的展開：新たな商業拠点空間の整備、浜の賑わい交流空間の整備、沿道型物産販売所の整備。
- ⑩ 震災メモリアル伝承事業の推進：震災メモリアルパークの整備
- ⑪ 新機能で地域を支える学校の整備：小、中学校の同一地域内への併設および、機能の強化。
- ⑫ 将来の希望を創る個性的な取り組みの推進：橋野高炉跡の世界遺産登録へ向けての取り組み。国際的なスポーツ大会の開催

釜石市

釜石市の12の計画、そして、高齢化するコミュニティを支える保健、医療の仕組みの構築の努力と、発表された計画を知ることのできるコミュニティスベースを紹介する。



釜石市の復興計画 震災前と 未来をつなぐ考え方

12のスクラム事業を持つ釜石の復興計画

津波により中心市街地がほぼ壊滅状態になった釜石市。人的被害は888人、家屋被害は16182戸のうち4658戸。2011年12月22日に発表された釜石復興まちづくり基本計画「スクラムかまいし復興プラン」は、「三陸の大地に光り輝き、希望と笑顔があふれるまち釜石」というビジョンのもと、12のスクラム事業を計画している。（左図参照）。

き、希望と笑顔があふれるまち釜石」というビジョンのもと、12のスクラム事業を計画している。

コミュニティと復興計画を橋渡しする

計画を私のこととして考える

復興計画は市のホームページで公開されているが、多岐にわたるその内容を、ネットで検索してもなかなか全貌はつかめない。印象はどうしても断片的になり、市民は常に「わからない」という印象を持つてしまう。

そこで、震災前から岩手・釜石市の商店街活性化を目指して活動をしていたアットマークリアスでは、仮設のコミュニティ施設『かだつて』で、すべての計画をプリントアウトして、手軽に手にとって読むことができるようにしたいと考えている。市民と復興計画を橋渡しする拠点となつていくのだ。

企画したアットマークリアス代表・鹿野順一さんは「インターネットに出てくるということは、検索という手段で見つけやすくなるのですが、一方で全体が

どういう構造になっているのか、またその量やバランスがどういうことになっているのかは、かえってわかりにくい。さらに、高齢者を中心にインターネットを使えない方たちも大勢いることも考慮しなければなりません」とインターネットに頼る情報提供について疑問を感じている。

ここでは、プリントアウトだけでなく、手書きの地図や地形の模型に計画のピンを打つこともできる。

「実際に手を動かすことを通して、市民自身が計画をまず理解し、近づく努力をしてみるきっかけをつくらうと。これもリージョナルコーディネータ（地域支援員）の活動なのです」。

商店街コミュニティの復興へ

鹿野さんは続ける「まだ周りに何もないこの場所で『かだつて』を始めたのは、2年目を迎え、復興の動きに変化があるということも関係しています。災害直後は、いろいろな人がこちらへやってきて、種々



コミュニティ拠点「かだつて」

復興の中で、仮設住宅から地域へ戻るにあたり、家や道路だけではなく、そこに健康を支えてくれる仕組みも必要だということをも多くの人が指摘している。

そこで釜石市では、医療も地域計画に組み込まれるように、働きかけが行われている。

釜石市でグループホーム

オスのように内も外もなく物事がつながっていった。しかし2年が経ち、活動に区切りをつけて戻る人もいます。今、震災前に僕らがやろうとしていたことに立ち返る時が来たと考えています。アットマークリアスをハブとして、外の力をここにつなぐ。今回できたさまざまなネットワークも、そこに活かしていく予定です」。

鹿野さんはアットマークリアスでの活動計画を二つに分けて考えようとしている。「震災前からあった課題」と「震災が起きてからの課題」だ。それぞれに応じて主体、場所、活動の掛け合わせが、新しい釜石をつくると考えている。

「これからの釜石の商店街については、防災のこともきちんと考え、同時に仕掛けのある楽しいまちにしていきたいし、それができると思っています」。力強い言葉で鹿野さんは話を締めくくった。

松田さんが所属するグループホームでは、地域に介護従事者がいないことが課題だということ。その地域間格差を意識において、これまで仮設住宅で行われてきた、介護、保険の活動を、今後はコミュニティや地域ごとに、活かしてほしいと訴える。

地域の健康はコミュニティの健康から

仮設住宅から始まる地域の健康と安心

高齢者へのケアを実現できる計画へ

被災当初から、岩手・釜石市の「平田仮設住宅」では、見守り、心のケアなどの仕組みを取り入れ、コミュニティを支える活動を行ってきた。



「見まもりの輪」による介護活動

平田仮設住宅では、当初から「見守りの輪」という活動

釜石の復興スケジュール

釜石の復興計画では、地域の復旧から始まり医療・保健や、産業、教育など震災前の課題へもまたがる回答となるような計画が考えられています。特に産業と医療・保健は釜石のこれからの特性となっていくでしょう。

	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
全体計画	復興期		基盤整備期			本格復興期			
まちづくり	応急仮設住宅入居、防災集団移転計画策定・合意形成	調査・測量・設計 釜石港防波堤工事	宅地造成、市街地かさ上げ	住宅復興		市街地復興の本格化			
産業	漁港・漁場・関連施設の復旧	養殖漁業の構築	森林の整備	産学官連携による6次産業化の推進					
商工		仮設店舗での営業開始			市街地復興の本格化				
観光	観光施設の復旧		公共交通機関本格稼働						
医療・福祉	医療の復旧・支援員	避難所・仮設住宅のケア・訪問相談・心のケア							
教育	学校設備の復旧・再建	仮設の児童館・学童クラブの整備							
			被災した保育園・子育て支援センターの整備						

（わわプロジェクトまとめ）

え方が始まっている。今年2月、市へ提出された提言「生きる希望にあふれたまちづくり」では、釜石市の復興の方向として「コミュニティの再生」と「安心のある健康な暮らし」の二つを目指すことが提案されている。

現地でこれらの支援の手配をしている「のぞみ病院」の高橋昌克医師は「これら平田の実績を、できればこれからのまちづくりに生かしていきたいと2月に提言を行ったところです。大事なのは地域の健康をつくるのは、コミュニティを元気にすることから、ということです」。

仮設住宅に始まった実験的試みは、2年間の成果とともに支持を広げ、地域に根を下ろす活動になろうとしている。

各地域で活動する人やプロジェクトを紹介します。そこから生まれる新しい「つながり」の可能性に期待を込めて。

わわの輪 ver.09

それぞれの場所で 構想される 私たちの復興計画

震災から3年目を迎えて、各地が始まっている
あたらしい計画、活動についてみてみましょう。
それぞれの場所で、地域独自の考え方も見られます。

岩手県宮古市田老地区 高所移転と嵩上げの組み合わせ

宮古市田老地区は、高さTP+10mの2重の大防潮堤があったが、1線堤が破壊され2線堤も越流し大きな津波被害となった。住民による地区復興まちづくり検討会では、防潮堤の高さを確認するなどしながら、一部嵩上げ+部分移転で合意し、土地区画整理事業及び防災集団移転促進事業が進められている。



<http://www.city.miyako.iwate.jp>

岩手県大槌町 集落ごとそれぞれの海が見えるまちへ

大槌町は人口の割が死亡・行方不明になる被害を受けた。「海が見える、つい散歩したくなる、こだわりのある美しいまちづくり」と「集落毎のボトムアップ型の復興まちづくり」の二つをマニフェストとしてまちづくり懇話会が何度も開かれ多様な計画となった。



<http://www.town.otsuchi.iwate.jp>

岩手県大船渡市綾里地区 避難路と低地の利用も考えた 住民による復興計画

大船渡市綾里地区では地区住民による復興委員会が立ち上がり2年余りの検討を経て、「復興まちづくり計画」を市に提案した。計画は、津波に流された低地の土地の使い方、避難路の整備、防潮堤のデザインについても現地で高さを確認するなどして、主体的に提案している。



<http://shinaiba.cocolog-nifty.com>

岩手県大船渡市暮石地区 「椿寿の郷づくり」(仮)

地区の自然文化の象徴・三面椿をモチーフに「椿寿の郷づくり」(仮)と命名。①広域を視野に入れたエコツーリズムの展開。②高所移転住宅団地と再建住宅での環境配慮。③津波被災跡地での生業再生、跡地利用。を3軸としながら地区の未来姿を提示している。



<http://ofunato-city.ecom-plat.jp>

岩手県陸前高田市広田半島 仕事の場から安全・安心の 集落へのプロセスを歩む

広田地区集団移転協議会が2012年3月に「漁港・船・農地復旧」→「保育所の高台移転・住宅地と避難路・避難地整備」→「公共施設の集約・骨格道路整備」→「低地利用・防潮堤整備」を段階的なプランを市に提案し、その1年後に進捗状況を確認した。



岩手県気仙沼市唐桑藩屋 「番屋」から始まる海の仕事の再生

「番屋プロジェクト」において、南三陸町志津川、東松島市浜市に続く3棟目の番屋。壮観小屋として利用することも計画されており、営業開始以降は、地場産の新鮮な牡蠣と帆立が食べられるということで観光拠点としても機能し始めている。



<http://www.karakuwa.jp>

川俣町小島集落コミュニティ・プラットフォーム支援事業 かつての小学校に集い、集落の再生へ向かう

集落内の閉鎖した小学校「おじまふるさと交流館」をプラットフォームとして、発災前からワークショップ、家具つくりなどの環境整備支援などや発災前後の集落の調査などを展開。2013年度は集落全体の再生計画の立案と事業の具体化に向けて活動予定。



宮城県仙台市南蒲生地区 昔からある居久根を 活かしたまちづくり

仙台平野の居久根と呼ばれる屋敷林に囲まれた集落。主体となる町内会では「新しい田舎」を目標に①安全・安心な暮らしができる環境づくり。②次代につなぐ居久根のある景観づくり。③南蒲生らしさを活かした産業・交流づくり。の3つに取り組み、居久根を再生する活動を行う。



<http://blog.canpan.info/okada/archive/57>

福島県新地町作田東地区住宅団地 集落全体で高台移転へ

津波により沿岸の約470戸が全壊し、集落単位を活かしながら高台移転する。平成23年度は住まい再建の方法を学びあい、24年度には移転先ごとのワークショップで計画を合意した。防災集団移転促進事業で7団地(24年12月に同時着工)をつくる。



<http://www.shinchi-town.jp>

仙台市平野・三本塚地区 農ある暮らしを軸とした 新たな集落づくり

津波に襲われた仙台南の沿岸部では防災のための植樹活動などが行われている。ここ三本塚地区では「新たな農ある暮らしの創造と持続可能な集落形成」をテーマに、①ワークショップ型公開学習会の開催、②集落等のプランニング、③住民はアングラ調査等を実施、地域産材・技術等を活用した共同発注型の住まいづくりを推進している。



<http://sr-board.com>

石巻市北上町 みんなで考えたにっこり計画案

「北上まちづくり委員会」では、住民たちが自ら学び、自分たちのまちのことを考え、決断し、実行してゆく仕組みづくりが目指されているまちづくりのみならず、なわい、教育福祉医療など、あらゆることについて話し合われている。



<http://jia.sblo.jp>

福島県飯館村の二地域居住 震災前から続く「まていな」村づくり

飯館村の「まていな村づくり」(まていな=じゅっり、ゆっりの東北弁)を震災前から支援して20年。除染・帰村を急ぐ行政とは別に、村民達の生活再建と故郷への思いを重ねた二地域居住(安心できる場所での集団移住と故郷の臨時滞在)の提案、コミュニティ維持を支援している。



<http://www.vill.iitate.fukushima.jp>

福島中期仮設住宅の計画 中期仮設期を木のいえに暮らす

南相馬市などの福島県内で幾つかのログハウス仮設住宅地を実現した、日大浦部研+はりゅうウッドチームが提案している中期仮設住宅とは木造を中心とした仮設住宅を解体・移設・再利用して、広さも確保しながら、一般の住宅の様に長期間住める性能を持った仮設住宅のことである。



<http://www2.fun.ne.jp>

3人よれば復興計画

首都大学東京 齋庭 伸

あまり知られていませんが「復興計画」を位置づけた法律というものはありません。災害があり「復興をしなくてはならないな」と考えた人たちが、みんなの意見をまとめ、共有できる方向性を考え、実現のためのスケジュールを立てたりしたものが復興計画です。あるべき姿なんでもなく、仲間が3人くらい集まってつくったものも、立派な復興計画なんですね。もちろん3人で出来る事は限られています。3人でなければ出来ない事もあります。その計画に共感が得られれば、誰かがその実現に協力をしてくれます。しかし、時間が経つと多くの人の「協力しますよ」という意はだんだん閉じてしまいます。閉じてしまったら計画を自分たちだけで実現していくはけなくなります。まだ東北での意は閉じきっていませんし、たくさんの支援者が東北に心を寄せています。3人でも、5人でも、10人でも、小さなところから計画づくりをスタートすることが重要ではないかと思えます。

協力: 首都大震災研究室、藤澤直樹 / 日本大学+奈良浩司 / 日本大学+佐藤隆雄、新井信幸 / 東北工業大学+野田明宏 / 地域設計+三井所隆史 / みいし計画事務所、藤賀理人 / 明治大学+山本俊哉 / 明治大学+神谷秀美 / マス、宇野健一(有) / アトリエ都市・地域空間計画室、江田隆三 / 地域計画連合、紙田和代 / ランドブレイン、竹内奈宮城大学、佐藤俊一 / NPO法人 美しい街住まい倶楽部、神原道、岡井健 / 都市デザインワークス、津田重夫、東京大学、坂口大洋 / 仙台高専、芳賀沼整+浦部智義、渡邊宏、手島浩之 / JIA東北支部



岩手県
大船渡市

おおふなと夢商店街協同組合理事長

伊東 修 さん
いとう おさむ

本設計画へ向けて

希望をもつて

新しい段階へ



photo: 吉澤健太

振り返る時は過ぎた。
前進あるのみ

「おおふなと夢商店街」は、約30店が軒を連ねる大型の仮設商店街だ。「やっべし祭り」「小紙v.o.i.7」などのイベントも開催し、地元以外の若者とも交流を図り、地域に貢献している。

その商店街の理事長を務める三陸海苔店、伊東 修さんは、旧商店街の仲間たちからの「仕事をしたい」という切実な声を聞き、「おおふなと夢商店街」の設立を思い立った。

震災直後は、精神的にも肉体的にも「少し休みたい」という声が多く聞かれた。また「これを機会に店をたたもうと思う」という仲間もいた。しかし

次第に伊東さんを始め、多くの仲間が「前に進まなければ」という気持ちに突き動かされるようになっていった。

「最初は10店舗くらい集まれば」と思っていました。が、仮設商店街の説明会を聞いた人たちが、自分たちもやりたいと。嬉しい誤算でした」と伊東さん。

支援もあった。知り合いが所有する1600坪の土地を2



「おおふなと夢商店街」と「やっべし祭り」との共同企画で開催されたファッションショー『夢コレ2013』。

伊東 修

岩手県大船渡市生まれ。大船渡育ち。2002年より「三陸海苔店」店主。2011年10月～「大船渡夢商店街」理事長を務める。

【連絡先】 有限会社 三陸海苔店
TEL: 0192-26-4155
E-mail: o-yume.a201@festa.ocn.ne.jp
(おおふなと夢商店街協同組合)

宮城県
山元町

工房地球村 施設長

田口ひろみ さん
たぐち生き生きと働き
住み続けられる
まちづくり支援の結晶
カフェ地球村

仙台市内から車で約1時間、福島県との県境にある山元町。沿岸部から少し内陸の、仮設住宅が立ち並ぶ隣接地に「カフェ地球村」はある。店内の壁には皆が描いた色とりどりの絵画が飾られ、棚には地元特産の果実を使ったアップルパイやいちごジャムが並ぶ。町の人たちが淹れたてのコーヒーを飲みながらほっとする、ぬくもりに満ちた空間だ。

工房地球村（山元共同作業所）は町唯一の障がい者が働く施設として、1998年の開設以来、障がいがあっても地域で生き生きと暮らすことをモットーに、地域の人たちとともに自立した社会参加を実践してきた。震災前から一人ひとりに寄り添ったケアを続けてきた施設長・田口ひろみさんへのスタッフやメンバーからの信頼は厚い。田口さんは震災後の混乱の只中、心を寄せ合う場の必要性を感じ、ともに活動を続けていた医療・福祉関係者らに協力を仰いで「おしゃべりサロン」をスタート。町内外の

写真: 三浦晴子 / ©財団法人たんぽぽの家
「カフェ地球村ができるまで」

地球村を支えるスタッフたち。オープン（2012年11月）以来、他の町や海のむこうからも人が訪れる。

田口ひろみ

宮城県生まれ。28歳のときに山元町へ。平成20年、山元町社会福祉協議会が運営する工房地球村（指定障害福祉サービス事業所山元町共同作業所）の施設長になる。

【連絡先】 工房地球村
〒989-2112 亘理郡山元町真庭字名生75-7
<http://kobo-chikyumura.com/>

支援者との活発な現状共有により、支援の輪が広がっていった。時は閉鎖を余儀なくされた地球村が再開した2012年の5月頃、田口さんのもとには全国から地球村へのエールが集まっていた。田口さんは「地域とのつながりを大切にしてきた地球村に、町の人がつづいて元気になるコミュニティスペースをつくりたい」と考えた。

カフェ地球村はまさに支援の結晶だ。トレーラーハウスは難民を助ける会から、ウッドデッキはライオンズクラブ国際協会から。全国から集まった寄付金

は、内装などにあてた。建物の設置には地元の業者も協力した。地球村や町民たちが主体となり場をつくりあげていく仕組みづくりなど、ソフト面は、財団法人たんぽぽの家が支援した。カフェ地球村の実践は、小さな町の人々が生きる力をとりもどし、創造する力を仕事にする事例として注目されている。「まちづくりは一人ひとりが主役。してもらおう側と思われがちな障がいのある人を中心に、町のみんなで誰もが生き生きと働き住み続けられる町をつくり、地域の復興に貢献していきたい」。

02

すだれ有効活用

垂らすだけで
もったいない！

暑さ対策／目隠し

すだれと棒の組み合わせ技ですだれの効果UP!
①日差しを遮る
②目隠しになりプライバシー保護
③急な雨から洗濯物を守るなど一挙三得なアイデアです。くるくるきれいに巻き取れるのもGOOD!!

材料
すだれ、棒道具
—場所
窓

ちょっとした工夫で大活躍

01

よしずの背比べ

大きいことはいいことだ

暑さ対策／目隠し

掃き出し窓を大きめのよしずで覆い尽くすアイデア。このよしずひとつで日除けだけでなく目隠しにもなり一石二鳥です。

材料
よしず道具
—場所
窓

iwasa lab

04

ハイブリッド日よけ

2つのアイデアが
合体した珠玉の一品

暑さ対策／雨対策

上部はプラスチックダンボールで雨の吹き込みを防ぎ、下部からは緑のカーテンが育ち日差しを防ぐ高機能な一品。防いだ雨はプランターに流れ込みとってもエコ！

材料
プラスチックダンボール、植物道具
はさみ、カッター場所
窓

プラスチックと緑の共演

03

ビニールシートで簡単ひさし

ビニールシートも
使い方次第

暑さ対策／雨対策

物干し竿とビニールシートの組み合わせでひさしのできあがり。こんなに簡単に、日差しも雨も防げてとても便利！

材料
ビニールシート、物干し竿道具
養生テープ場所
窓

物干し竿にビニールシートを貼る

連載

二年目の
「仮設のトリセツ」
第3回

強い日差しから暮らしを守る

入手しやすい素材で日除けをつくらう

鬱陶しかった梅雨が、そろそろ明ける季節です。どんよりとした陽気から、二転、三転、ジリジリとした、真夏特有の強い日差しが照りつづけます。猛烈な暑さに、気力、体力ともに奪われがちになります。そんな真夏の暑さ乗り越えるため、少しでも快適に過ごせるアイデアとして、身近な素材でできる「日除け」を紹介します。素材は、ホームセンターなどで入集できる「よしず」や「すだれ」が中心です。なかには、ツル性の植物を使った緑のカーテンとプラスチック、段ボールを組み合わせて影をつくるだけでなく、雨を除け、防いだ雨をプランターに流し込むというハイブリッドタイプもあります。

協力：新潟大学工学部若佐研究室
『仮設のトリセツ Ver.3』
<http://kasetukaizou.jimdo.com/>

岩手県
釜石市

のぞみ病院医師

たかはしまさかつ
高橋昌克さん

釜石の医療を 見つめてきた、 守つてきた



釜石の医療を 立て直すために

その仕事の輪郭が見え始めたころ、2011年3月11日の震災があった。

高橋昌克さんは、震災以前に金沢医大から釜石へ派遣された。それは、当時から危機感を持たれていた地域の医療の崩壊を食い止めるためだ。

産業構造が変わってしまった結果として、医療とコミュニティのバランスが崩れてしまった状態にあった釜石市の地域医療の立て直しを支援するために、石川県七尾での実績を買われて招聘されていた。

「緊急の体制で避難所を支えていた4月に東京大学高齢社会総合研究機構の辻哲夫教授から電話があったのです。『至急相談したいので東京まで来てくれ』と。自衛隊が封鎖していた道路を市長からの特命で何とか緊急車両で通つてたどり着き、始まったのが、この釜石の平田仮設住宅を拠点とする見守りを入り口とした、地域包括ケア支援でした。」

「自殺」という悲しい事態を



釜石市平田地区の仮設住宅

高橋昌克

1959年生まれ。医師、医学博士2005年より金沢医科大学より釜石市民病院へ向う。2006年釜石市健康福祉部付地域医療担部長 釜石のぞみ病院医師、2011年より釜石の仮設住宅の保健・医療支援に携わっている。

【連絡先】 釜石市健康福祉部
〒026-8691 岩手県釜石市大渡町3丁目15-26
釜石市健康福祉センター TEL:0193-22-0179

避けるため考えられたその方法は、その前のストレス暴露やうつ病予備群のころから自治会、介護士、看護師、心理士、医師、保健師のネットワークが「見守りの輪」として高齢者の健康、介護、医療をサポートする仕組みだった。

担い手のトレーニングは5月から8回にも及び、平田の仮設住宅での生活がスタートした。

そして、それらの成果は震災から一年間の相談調査の中で、他の仮設住宅地に比べ震災による心の不安を訴える人が明らかに少ないという結果に表れていくでしょう。」

現在、このチームは、釜石市の復興計画に協力して、仮設住宅解消後の復興住宅地で心のケアから医療までのネットワークを復興住宅地でも作り上げていくことだ。「震災前に手掛けていたことに、再び向き合うことになったのです。今回の仮設住宅の支援で培われた共有知を、これからの釜石の医療の基盤に据え自立させていくことが、私たちの活動のゴールになっていくでしょう。」

まちづくり会社を 立ち上げ 集落を復興する



小泉地区集団移転協議会事務局長

かのう たもつ
加納保さん

自分たちが いえづくり、 まちづくりの主体

いま、防災集団移転（高台移転）について見渡した時に必ず「あそこはどうなっている」と話題になる地区が、この気仙沼市小泉・本吉地区の動きだ。

防災集団移転においてその実現過程ではいろいろな課題があるが、通常、計画実行には「住民の意思決定」というところ

この小泉では住宅建設計画実行の仕組みとして、株式会社を住民が資金を出し合う形で立ち上げたのだ。

事務局長の加納さんは、その経緯をこう語る。

「2011年の3月に避難所で『家をどうしようか』とみんな話し合いました。そのうち『みんなの家をつくらないか』と誰かが言いだして。いろいろ調べ始め、防災集団移転のことも知りました。地域の若手（40代、50代）が中心となり、地域の長老たちに説明をしていく形でだんだん形が出来上がっていき



高所へ移転した集落の予想図

加納 保

1960年生まれ。地域活動に積極的に取り組んできた経験から会の中核メンバーに。情報の収集や分析・発信などに活躍。

【連絡先】「小泉地区の明日を考える会」
<http://www.saiseikoizumi.com/>

既存のコミュニティを土台として、目的が共有され、そして前に向かって具体的に動き出したのだ。

「5月ごろ、専門家を呼んで協力してもらおうと、奥尻島の災害支援の経験のある北海道のアトリエバンクさん、北海道大学の森傑先生に相談をしました。ワークショップは20回を超え、住民の中で目的意識がはっきりしてきたのです。」

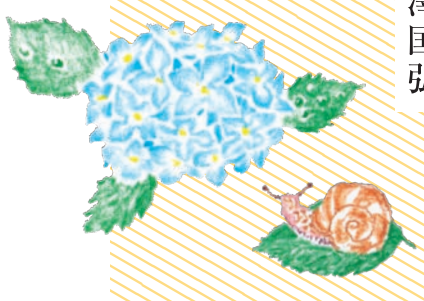
目的実行の手段として選ばれたのがまちづくりいえづくりの株式会社だ。

「もちろん、みんなの家を建てるのが目的ではあるのですが、その後のまちの維持を考えるとこの会社の役割だと考えています。震災前からの問題をどのようにみんなが解決していくかを考えてこの組織がつくられたのです。」

国に認定された防災集団移転の造成計画として気仙沼市では第一陣となった。2013年夏から造成工事がスタートする。加納さんたちもいよいよ本格的な家づくり、地域づくりの計画へと段階を移し正念場を迎える。

梅雨の季節を 気持ちよく、 健康に過ごすには

名古屋大学大学院薬学研究科／大澤匡弘



微生物にとって 梅雨は最高の季節

ムシムシ・ジトジトが気になる季節になりました。私たちにとってみると、あまり気持ちのよい季節ではありませんが、微生物（細菌）には大変生活しやすい最高の季節です。

梅雨は連日、雨が降りますので、洗濯物を室内で乾燥させなければならぬ日が多くなります。

そんなとき洗濯物からいよゝな臭いがしてきます。この臭い、十分に乾いていない洗濯物に繁殖してしまった細菌が作る化学物質が原因であるとわかりま

食べ物につく 細菌に要注意！



大澤匡弘

名古屋大学大学院 薬学研究科／神経薬理学分野 准教授
日本薬理学会評議員、日本精神神経薬理学会評議員、日本薬学会薬理系薬学会若手世話人、日本緩和医療薬学会理事、日本緩和医療学会、日本糖尿病学会、Society for Neuroscience（米国）など。著書：「Pharmacotherapy」（分担執筆：ネオメディカル2008年）、「実践行動薬理学」（分担執筆：金芳堂2009年）。訳書：「ストレス大辞典」（分担：丸善2009年）など。連載：「薬から見る病態生理」（Clinical Pharmacist、メディカ出版2010年より）ほか。専門は神経科学、疼痛学、精神薬理学。学術論文も多数発表。

菌がくっついていきます。食べ物に付着している細菌も、湿度の高い梅雨の季節には大量に発生しやすくなります。つまり、多少であれば口にしても何の害も起こさない細菌が、大量発生したことによりとても怖い存在になるのです。

例えば、サルモネラ菌は食中毒を起こす有名な菌ですが、鶏卵や食肉類に沢山くっついていきます。魚にもくっついていて、それが十分にしないと食中毒が起きてしまいます。細菌は、温度が低いところではなかなか増殖することができませんので、すぐに調理しないときには材料を直ちに冷蔵保存をしてください。そして、できる限り早く使い切ることが大切です。

また、食べ物を腐らす菌と食中毒を起こす菌は同じとは限らないため、腐っているかどうかだけでは判断の目安にならないという点に注意が必要です。

梅雨をさらに億劫にする細菌の存在。彼らの特徴を理解して、正しく対処し、気持ちよく快適にこれからの季節を過ごしましょう。



『つくる事が生きること 東日本大震災復興支援 プロジェクト』

発行元：一般社団法人非営利芸術活動団体コマンドN
価格：2,310円(2,210円＋税)
ページ数：368頁
発売日：2012年10月1日

時の経過とともに
価値を増す保存記録

『わわ新聞』を発行する「わわプロジェクト」は、現地で地域に息づく文化を大切にしながら活動する人々を紹介するなど継続的な活動を続けている。この本は、2013年3月開催した「つくる事が生きること 東日本大震災復興支援プロジェクト展」の内容をまとめた一冊、ぜひ読んでみてほしい。

たものだ。

2013年4月には、復興への記録を残した資料性の高い1冊として日本図書館協会選定図書に選定された。復興への活動は今も変わらずに続いている。むしろ被災者自身が自立へと向かうこれからが本番といえる。自分の住む場所を客観的に見つめ、未来について考えるキッカケを与えてくれるこの一冊、ぜひ読んでみてほしい。

岩手・宮城・福島で活動する 16人のメッセージを集録

わわ新聞読者限定！

¥2,000(送料込み)

事務局への直接注文に限りです



岩手県大槌町吉里吉里
NPO吉里吉里国 復活の薪
芳賀正彦



宮城県石巻市
石巻ワンダー横丁
梶原千恵



福島県浪江町
鈴木酒造
鈴木大介

【わわプロジェクト事務局、全国の主な書店、ミュージアムショップ、Amazonなどで販売中】
お問い合わせ：TEL03-6803-2924（わわプロジェクト事務局） <http://book.wawa.or.jp>

連載
仮設の
イーハトーヴ

仮設のイーハトーヴ『セロ弾きのゴージュ』

石神 夏希



私が以前よく行っていた居酒屋で、たまに居合わせるマツチ芸の得意なおじさんがいた。「テツさん」といった。

最初、私は「マツチ芸」と聞いてもピンと来なかったのだが、昔はスナックなんかでお姉ちゃんにモテるために練習する男の人がけっこういたらしい。そんな話をしながらテツさんは、まるで忍者が印を結ぶように指を組んで一瞬で火をつけたり、火がついたままのマツチをパクッとくわえたり（こうすると次に飲むお酒が美味しくなる）といったワザを見せてくれた。

なかでもすごかったのは、テツさんのマツチ演奏だった。

マツチ演奏といっても、マツチ棒で演奏するのではない。マツチの箱を指で弾いて、音楽を奏でるのだ。まず左手の中指と親指でマツチ箱をしっかりと支える。右手の5本指をフルに使い、爪先で箱を打つ。たとえるなら、フラメンコのダンサーが激しく踏みならす足のリズムのように。タン、タン、タン、タ、タン！と、演奏するテツさんの指使いはたしかに踊るようだった。

あんたもやってみるとマツチ箱を渡されたものの、指が動かない。テツさんが弾くと紙箱とは思えないようなタン！という高い音が鳴るのに、何度やっても私のマツチ箱からはくぐもった音しか出なかった。練習用にと山盛りのマツチ箱をもらったのはいいものの、なかなかうまくならない私は飽きてしまい、マツチは上着のポケットの中でしけるばかりだった。

テツさんは、特に楽器をやっているといないと言う。

でもそのリズム感があんなりすごいので、さつと若いころ音楽をやっていたのだから、私は思っていた。そんな風に思う理由は、ほかにあった。

ある日のこと、店の有線が壊れてしまつてクラシックが流れて続いていたことがあった。普段は演歌ばかりなので「たまには高級な店みたいでいいね」と笑っているとき、突然、空を引

き裂く稲光のような、猛烈に激しい弦楽器の曲がかかった。「すごい曲」とつぶやいた私に「インドの虎狩り」だな。チェロの名曲だ」とうなずいたのがテツさんだったのだ。

テツさんは、実はわけあって音楽の道を断念したプロの演奏家なんじゃないか。そう思っているとき、眉間にシワが寄った顔を音楽家らしく思えてきた。今ははげているが、昔は髪もボーボーだったかもしれない。ペーター・ベンみたいにな。

私たちは特別親しいわけではなかった。年齢も親子ほど離れていたし、テツさんも私も社交的な方ではなかった。ただ時々、思い出したように「最近、書いているのか」と聞かれることがあった。私が前に一度だけ、小説を書いていると喋ったことを言っているのだった。でもそれで食っていくのかとは聞かれなかったし、私も、書くことで食うのはとくに諦めてしまったと、わざわざ言うつもりもなかった。でもそんなことを聞いてくる人はテツさんの他に誰もいなかった。

ある晩いつもより遅く店に入ると、テーブル席でテツさんと、テツさんと仲よしのおじさんたち数人が飲んでいた。誘われるまま仲間に入れてもらい焼酎のお湯割りを飲んでみると、大將がカウスターの向こうから「テツさん明日、仮設を出るんだってよ」と言った。どこに行くの？と驚いてたずねた私に、テツさんは車で何時間かかる大きな街の名前を答えた。長いこと迷ったけれど、奥さんの実家の近くに住むことに決めたらしい。私たちはおめでとうと言つてもう一度乾杯した。

真夜中すぎに店を出て、暗い道を一緒に帰った。途中、ふとテツさんが最近、書いているのか」と聞いた。私は「まあ」とあいまいに返事をした。テツさんはそれきり黙っていたが、道が分かれるところで「今度読ませてくれよ」と言った。

テツさんが手を差し出し、私たちは握手をした。私はもう一度、テツさんの手のひらの中で楽器に変身するマツチ箱が見たいと思った。でも言えなかった。テツさんは街灯もほとんどついていない道を帰っていった。もう会うこともないだろう。あの演奏をまた聞くには、自分で弾けるようになるしかないんだな、と私はぼんやり思った。

私はポケットに入れたばなしの、テツさんにもらったマツチ箱を取り出してみた。爪で弾いてみると、ポコ、というにぶい音がした。こりゃ、だいぶ練習が必要だな。くたびれた箱からマツチを一本取り出し、火をつける。一瞬、パツと燃え上がり、すぐに暗くなった。

私はペーター・ベンのように髪を振り乱し、チェロを弾くテツさんを思い浮かべて笑つてしまった。いつかどこかで、テツさんの弾く「インドの虎狩り」を聴く日が来るだろうか？テツさんは、私の書いたものをいつかどこかで読むだろうか？

マツチの残り香だけが天の川のように、いつまでも夜空にただんでいた。

連載「仮設のイーハトーヴ」

東北の精神を表現した宮沢賢治の作品群を下敷きに、仮設住宅地で営まれるひとと風土が形作る暮らしを賢治作品の登場人物の姿を借りて描く。それは、風土の忘れかけていた力と呼び起こすところであり、また「出口へ」向かってどう生きていくのかという希望に向けたものがたりでもある。

今回の原作は、宮沢賢治の亡くなった翌年に発表された「セロ弾きのゴージュ」（1934。底本「宮沢賢治ちくま日本文学3」／筑摩書房（2007））

執筆：石神夏希・脚本家

劇団ベビシ 結構設計を中心に脚本・演出家として活動するほか、物語、インタビュー、広告など様々な形で文筆活動を展開している。現代劇の代表作に「東京の米」（2002）「お母さんしかない国」（2011）など。

挿絵：大野舞・イラストレーター

旅する絵描き「デナリ」として幅広く活動中。「日本の神様カード」（ヴィジヨナリー・カンパニー）、絵本「星つむぎの歌」（響文社）など。2009年毎日新聞にて連載された「もしもし下北沢」（よしもとばなな）で挿画を担当。



【読者プレゼント】プレゼントをご希望の方は、応募用紙にご記入いただき、ハガキまたはメール、FAXにてお送りください。

*締切は8月31日（金）【必着】とさせていただきます。*プレゼントの当選は発送をもってかえさせていただきます。
*プレゼント品は被災地で生まれた手仕事やご当地名物などを中心に、わわプロジェクトが直接買い付けてお届けしています。



① わわプロジェクト復興展覧会の本『つくりが生きること』<10名様>

東北で活動続ける15人の復興リーダーのメッセージ、そして創造性にあふれた建築家やクリエイターらの80ものプロジェクトを紹介。わわプロジェクトが制作したオススメの一冊。

② 気仙沼・帆布ペンケース<3名様>

“気仙沼”の文字や気仙沼を象徴するカモメやツツジなどの模様が入ったGANBAARE気仙沼帆布のペンケース。



③ 手づくり手芸品<4名様>

夢ネット大船渡の内職支援によってつくられた手芸品を4名様に。どれが当たるかは届いてからの楽しみ。



④ ポストカード 3枚セット<5名様>

大船渡ゆめ商店街の文房具店・光研社の及川さんが描くポストカード。3枚セットを5名様に。どんなメッセージが届くかは当選後の楽しみ。

【ハガキで応募】応募用紙をハガキに貼り、以下の住所までお送りください。〒101-0021 東京都千代田区外神田6-11-14

わわプロジェクト「わわ新聞9号 プレゼント」係

【FAXで応募】応募用紙を03-6803-2925までお送りください。

【メールで応募】応募用紙内の項目をメール本文にご記入いただき info@wawa.or.jp までお送りください。

プレゼント応募用紙【ご記入欄】

●住所：〒
●氏名：
●電話番号：

●希望するプレゼント（いずれかに○をつけてください）

① 本 ② ペンケース ③ 手芸品 ④ ポストカード

●『わわ新聞』をお読みになった感想

●『わわ新聞』を入手した場所

●『わわ新聞』で今後取りあげてほしいこと

編集後記

わわ新聞の第九号をお届けします。今回は復興の道しるべとなる「復興計画」について、各地における具体的なものを拾いあげ、取材をいたしました。地域を知らず、その地域の未来を考えるための、議論や活動の一つの軸がそこにあるはず。その中で今回は一面に福島についての復興計画を取り上げました。いまその道筋はどこにあるのか、何を考えているのか、そして福島だけの問題ではない課題について、私たちはそれぞれが引き続き考えなければなりません。これからも、それぞれの場所を感じておられること、考えておられることを伺っていききたいと思います。どうぞ声をお寄せください。（新）

■暮らしの情報募集■

お住まいになられている仮設住宅や、みなし仮設住宅でのイベント情報やお困りごとなど、暮らしに関する情報を編集部へお寄せください。企画の参考にさせていただきます。

ご応募ありがとうございます。

わわ新聞08号「読者プレゼント応募」にいただきました、「わわ新聞」への感想を一部紹介させていただきます。

最近の話題 花粉症の事とか色んなカーテンの説明等いろいろ書いてくれた。分と書いて。民話や本など、仮設のイーハトーヴを、重宝。ほほほに感謝して話して花が咲きました。 仙台市 A・Kさん

皆さんのガンバリが伝わってきました。ほんとは、人はひとりでは生きていけないので、お互いに支え合える場所が、うまれるのが、わわ新聞から、パワーを頂きました。 仙台市 S・Sさん

私は、仮設住宅で生活して、部屋を整頓して、野菜作りをしています。新聞を読んで、皆様のいろいろな事で、頑張っている人達と、前向きに考えさせられました。これから頑張ります。 会津若松市 M・Hさん

わわ新聞は、東京で生活する私に、3.11のことを考えさせてくれる、繋いでくれる大切なツールです。たくさんの方が読んでくれると思います。私はわわ新聞に読んでいます。 東京都 H・Iさん

発行元／わわプロジェクト

一般社団法人非営利芸術活動団体コンドN

発行人／中村政人

東京都千代田区外神田6-11-14

TEL／03-6803-2924

FAX／03-6803-2925

メール／info@wawa.or.jp

ウェブサイト／http://wawa.or.jp

編集／新堀 学・澤田 忍・高村陽子

イラスト／遠藤麻衣

印刷／株式会社北鹿新聞社

わわプロジェクトの活動は平成24年4月より中外製薬株式会社の支援を受けています。